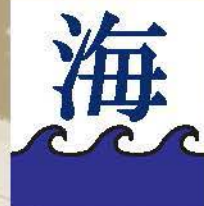


2013.12.11 (Wed.) - 2014.1.12 (Sun.)

京都大学理学部中央図書室 共催展示  
京都大学総合博物館

MUSEUM  
THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM



# 海を伝える

- 理学部に薫る 19 世紀博物学の図書コレクションから -

## 展示解説



バジル・ホール著『朝鮮・琉球航海記 (1818 年刊)』より「サルファー・アイランド (硫黄島)」

### 飽くなき好奇心から人は海を越え、その知は本になった

19 世紀、その版図をアフリカ、アメリカそして極東へと拡大させた西洋諸国は、それら“異界の地”で未知の固有の自然や文化と出会った。多くの欧米の科学者が海を越えて世界各地へ赴き、その成果を論文や書籍にまとめたが、当時は写真技術が極めて低く、異国の動植物や風俗を正確に描くには、専門の絵師の手による、精緻で色鮮やかなイラストが不可欠であった。明治 30 (1897) 年創立の京都大学でも、それらの専門書が多数揃えられた。

それから百余年。これらの専門書は、今や全世界にいくつもない貴重書となったが、一部は経年劣化していた。このたび、理学部中央図書室が所蔵する貴重書のうち、特に緊急を要する貴重書 99 冊の修復が完了した。そこで今回、先の京大博物館企画展『海』にちなんで、海にまつわる 7 タイトルを展示する。人類が科学という大海へ漕ぎ出した当時に思いを馳せてほしい。

JEANNE at the PRINCE of LEE HOON PEAKY

唐沢 與希・松岡 廣繁 (京都大学 理学研究科)



# バジル・ホール著 1818 年刊

## 『朝鮮・琉球航海記』

Basil Hall, 1818.

*Account of a voyage of discovery to the west coast of Corea,  
and the Great Loo-Choo Island; with an appendix containing.*



英国の海軍将校バジル（ベイジルとも）・ホールによる、1816 年に行われた東シナ海の航海の記録。全体で約 460 ページ余の、ボリューム感のある著作となっている。第 1 節(57 ページ)は朝鮮半島西岸の島々に関する観察事項、第 2 節と第 3 節(合計 166 ページ)が琉球諸島における記述で、以下付録として航海日誌や地質に関する記述も充実している。さらに巻末には H.J. クリフォードによる琉球語の言語学的研究成果も 70 ページほどを占める。地図・海図や、手彩色された美麗かつどこか可愛らしい画風の風俗画が添えられ、自然科学と民俗学の両面において、当時の同地域を知る上で重要な情報源である。

この時の英国海軍による航海は、はじめ英国を 1816 年 2 月 9 日に発ち、8 月 11 日に中国天津港に入った。これは清国に貿易関係の改正を訴えるアマースト使節団を送り届けるためであった。その用が済むと、フリゲート艦アルセルト号（マレー・マクスウェル艦長）と砲艦ライラ号（ホールは本艦艦長）は、朝鮮半島西岸に向かった。そして 9 月 1 日に最初の島に接し、半島西岸を南下して、9 月 10 日には日本に向かった。9 月 13 日に硫黄島に近づき（強風で上陸は断念）、さらに南下して同 16 日に「大琉球島」（現在の沖縄島）那覇港に入港した。那覇には、途中幾度か周辺の調査に出たほかは、10 月 27 日までの長期滞留となった。同日朝、那覇を発って、10 月 31 日には台湾を過ぎ、東シナ海を後にしたのであった。

当時の李氏朝鮮は徳川幕政下の日本よりも極度な鎖国状態で、西洋人による朝鮮人の記述としては稀有かつもっとも初期のものの一つとなっている。琉球人については有名な「琉球では武器を用いず、貨幣を知らない」とか「私たちは、いかなる種類の貧困や苦痛も見なかった：私たちが出会ったすべての人々は満足しており幸せそうだった（We saw nothing like poverty or distress of any kind: every person that we met seemed contented and happy.）」などの記述で、平和で純朴な人柄を記している。

本書にも明らかなように、著者バジル・ホール（1788- 1844）は、軍人であると同時に、傑出した旅行家であり作家であった。本書の他にも、南米、北米、インドネシアなど世界各地の記録を残している。アマースト使節団は清の嘉慶帝に会うこともできないという惨憺たる結果となったが、その同じ時、海軍ではかなり純粋な探究心に基づいた活動をし、記録を著しているという点でも大変興味深い。（松岡）



## コンラート・テミンク著 1842 年刊

### 『日本の島の動物に関する概要』

Coenraad Jacob Temminck, 1842.

*Coup-d'oeil sur la fauna des îles de la sonde et de l'empire du Japon : discours préliminaire destiné à servir d'introduction à la Fauna du Japon ; Aperçu général et spécifique sur les mammifères qui habitent le Japon et les îles qui en dépendent.*



シーボルトの『ファウナ・ヤポニカ』（日本動物誌）として有名な本書の原題は、“日本皇国島嶼の動物相の概要：日本の動物相を知るための予察的論説；日本及びその所属島嶼に生息する哺乳類の概要と詳細” というような、大変長いものである。ここに蔵する哺乳類篇はライデン王立自然史博物館（オランダ）の館長テミンクによって著された。（シーボルト自身は『ファウナ・ヤポニカ』の編者であって記述をしてはいない。）

ドイツ人シーボルト（Philipp Franz Balthazar von Siebold : 1796-1866）が来日したのは、11 代将軍川齊昭時代の 1823 年であった。長崎の出島に滞在しオランダ商館医を務めるとともに、高野長英、伊東玄朴、伊藤圭介など日本中から集まった塾生に蘭学・西洋医学を講じた。またシーボルトは、日本の動植物と文化・民俗に対し驚異的な探究心をもって接し、庶民の下駄から二ホンオオカミの骨格標本まで、およそ目につき手に入るものは収集しオランダに持ち帰った。1828 年の帰国時に、禁制品の日本地図（伊能図）を持ち出そうとしたことが発覚し、関係者が厳罰を受け本人も国外追放処分となったこと（シーボルト事件）は、“ご愛嬌” と言うべきであろう。

『ファウナ・ヤポニカ』はシーボルトがオランダに帰着した 1830 年からライデンのテミンクと同館学芸員シュレーゲルらによって 1833 年から刊行が始まった。甲殻類篇、哺乳類篇、鳥類篇、両生爬虫類篇、魚類篇の 5 部からなり、すべてが発刊されたのは 1850 年であった。この長大なシリーズが、それまでほとんど知られていなかった日本の動物相を、それぞれの巻に添えられた美しい図版とともに西洋に広く伝え極東への科学的探究心を大いに喚起した業績、そして日本の生物学にとっては、身近な生物に世界の分類体系における「学名」を付した業績はまさに金字塔である。

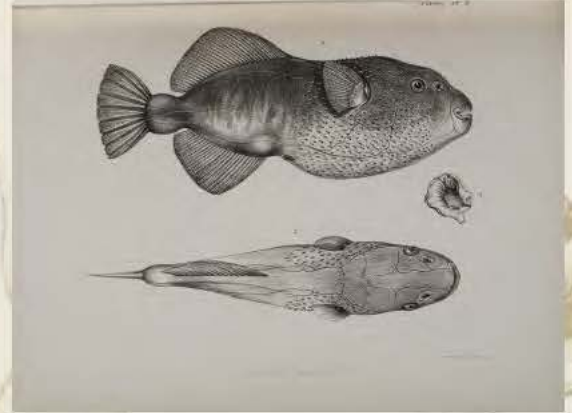
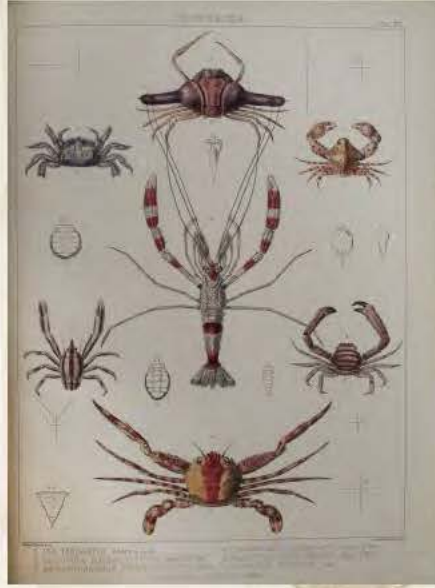
『ファウナ・ヤポニカ』を所蔵する公的機関はそれほど珍しいわけではなく、京都大学においてもすでに図書館機構が動物学教室の所蔵本をデジタル化し公開している。それでもここに紹介するのは、他の自然史関連書籍と「一緒に」所蔵されていることの意義は高いと考えるからである。（松岡）



# ジョン・エドワード・グレイほか著 1850 年刊

## 『サマラン号航海の動物学』

John Edward Grey, John Richardson, Arthur Adams, Lovell Reeve, and Adam White. 1850.  
The zoology of the voyage of H.M.S. Samarang: under the command of Captain Sir Edward Belcher, during the year 1843-1846.



サマラン号はイギリス海軍のフリゲート艦である。本書はエドワード・ベルチャー艦長のもと、多くの科学者が乗船して、1843年から1846年にかけて、東シナ海、南シナ海、東南アジアを広く調査した記録である。途中琉球や長崎にも来航した。

本書はこの時の成果のうち、動物学分野の記述である。哺乳類、魚類、軟体動物、甲殻類について、膨大な美しい図版とともに詳細な記載と動物地理学的な情報が記されている。哺乳類をジョン・エドワード・グレイ、魚類をジョン・リチャードソン、軟体動物をアーサー・アダムスとロベル・リーブ、甲殻類をアーサー・アダムスとアダム・ホワイトがそれぞれ担当している。アーサー・アダムスは全体の編集者であるとともに、軟体動物と甲殻類のイントロダクションも著している。

本書に掲載されている図版について特筆すべきことがある。いずれの分類群についても、生体・生態の描写が含まれることである。艦上で画家たちが採集したての動物を活写したのであろう。本国に持ち帰られた貝殻や固定された「標本」をもとに描かれる通常の出版物の図類と大いに異なり、驚くほど「活きのいい」動物の姿を伝えている。

編者兼著者のアダムス（1820–1878）は英海軍の軍医である傍ら非常に「多作」な貝類学者として活躍した人物である。時として種の記載に際して十分な図示や特徴の記載がないといった評価も受けるが、本書の生き活きとした記載と図版（そして本書完成のために本人が注いだであろう大変な労力）こそがアダムスの自然観を表しているであろう。（松岡）

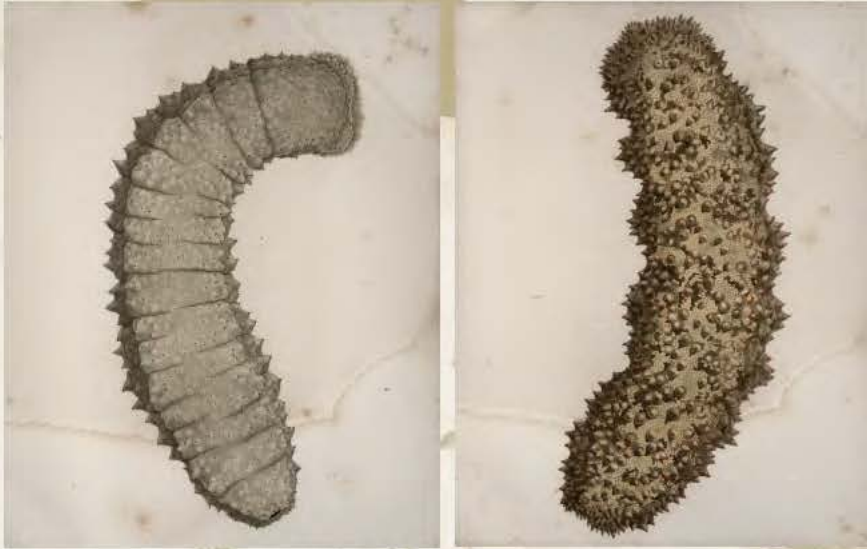
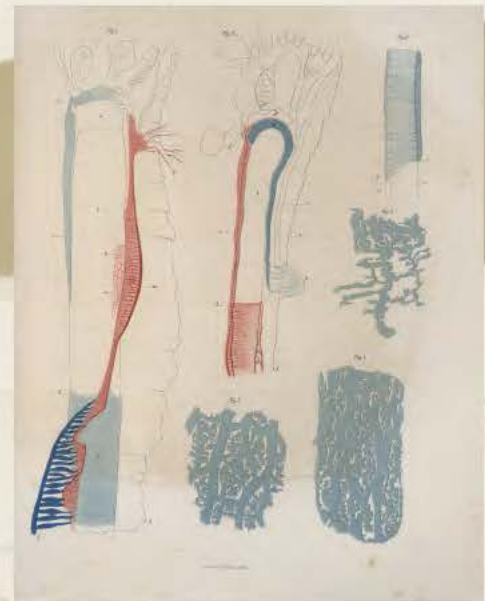


カール・ゼンパー著 1868 年刊

『フィリピン群島のナマコ類』

Carl Semper, 1868.

*Holothurien: Reisen im Archipel der Philippinen.*



著者カール・ゼンパー（1832 年 7 月 6 日－1893 年 5 月 29 日）はドイツの民族学者・動物生態学者である。1856 年ヴュルツブルク大学で動物学の博士号を取得した後、ハンブルクのごドフロア博物館に籍を置きながら、フィリピンやパラオに 1865 年まで滞在した。この間ゼンパーは、太平洋の人々の民俗や当地での体験談について著作を発表するとともに、膨大な生物標本を採集して分類学的研究も進め、帰国後も一連の著作として発表していった。

本書はその「ナマコ」の分冊。大判の図版に 1 種ずつ図示するところは、圧巻の一言である。ナマコは肉質な外観で、一見したところは意外であるが、ウニやヒトデと同じく棘皮動物である。その「棘」は微小な骨片状で、肉質の中に埋没している。ナマコ類の分類にはこの微小な骨片が重要視され、本書でも大きなナマコの姿形とともに図示記載されている。さらに内臓の解剖学的記載もあり、綿密な基礎科学を重視するドイツ学派の気質が感じられる。（松岡）



# ウィリアム・スウェインソン著 1820 年刊

## 『動物学図譜：貝類学編』

William Swainson. 1820.

*Zoological Illustrations or Original Figures and Descriptions  
of New Rare, or Interesting Animals:*

*Selected Chiefly from the Classes of Ornithology, Entomology,  
and Conchology and Arranged on the Principles of Cuvier and  
Other Modern Zoologists.*



ウィリアム・スウェインソン (1789 年 10 月 8 日–1855 年 12 月 6 日) は、ロンドン生まれの植物学者・動物学者である。特に、昆虫、貝類、魚類、爬虫類の研究において有名である。イギリス軍に所属していた 1807 年、マルタ島に赴任した際に、特に魚類の収集に興味を持ちはじめ、シチリア島やギリシャへと移り、地中海の動植物を広く集めた。軍を除隊した翌年の 1816 年には、ヘンリー・カスター率いるブラジル探検隊に同行し、花、昆虫、魚類のコレクションを行った。スウェインソンは、これらの収集と研究の成果を、1855 年に亡くなるまで、次々と書籍にまとめて発表した。スウェインソンは、生物の研究が神の理解に繋がると考えていたようで、著作の一つでは、その冒頭に旧約聖書の詩編 104 篇の一節「地はあなたの造られたもので満ちている。かしこに大いなる広い海がある。その中に無数のもの、大小の生き物が満ちている」と引用している。その一方、彼が次々と著作を発表したのは、経済事情が悪く、常に借金に悩まされていたためでもあるという。

現在、スウェインソンは、研究者としてよりも、むしろ生物画家として評価されている。特に、初めてリトグラフを科学の文献の図版として使用したことは、科学の専門書において重要な転換点であった。リトグラフ (石版画) とは、一般的な版画のように板を彫って原版をつくるのではなく、平らな石 (現在では金属板) の上に、油分を含んだ薬剤で下絵を描いて原版を作る手法である。筆のタッチをそのままに大量に複写できる上、コストが低く抑えられる点が特徴である。

科学者として、また画家として活躍したスウェインソンのコレクションは、昆虫 2 万点、植物数千点、彼の描いたスケッチは魚類 120 点、鳥類数百点に及ぶ。

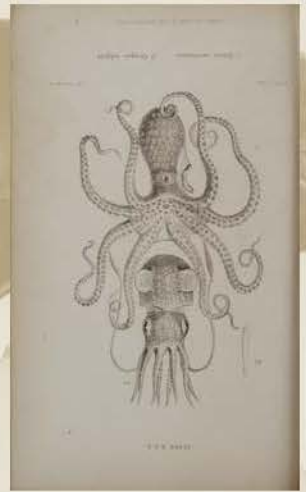
1820 年から 1823 年にかけて出版された『動物学図譜』は、全 6 巻からなる。その中に、鳥類 26 点、昆虫 8 点、貝類 29 点の計 63 点のリトグラフが掲載されている。イギリスの自然史研究の黎明期において、もっとも評価の高い書籍のひとつである。ここに展示したのは、『動物学図譜』の貝類学編である。二枚貝、巻貝が色彩豊かに描かれている。特に陸生の巻貝であるカタツムリは、カラフルな殻を持つものが多いが、それを正確に描写している点に注目されたい。(唐沢)



# エドワード・フォーブス／シルバヌス・ハンレイ著 1853 年刊

## 『英国の軟体動物門の歴史とその殻 第 1 巻』

Edward Forbes and Sylvanus Hanley. 1853.  
*A history of British mollusca, and their shells., vol. 1.*



軟体動物とは、二枚貝類、巻貝類、イカやタコなどの頭足類、その他いくつかのグループで構成される動物の分類群で、例外はあるものの、多くの種類がそれぞれに固有の形態をした殻を持つ。古くは貝殻が貨幣として使われたように、特に二枚貝や巻貝の殻はその色と形から、多くの人を魅了してきた。1853 年に刊行された『英国の軟体動物門の歴史とその殻』全 4 巻は、イギリスに見られる軟体動物の殻を緻密に描いた大著である。192 の図版の一部には、彩り鮮やかな彩色が施されている。

このモノグラフは、無脊椎動物学者のエドワード・フォーブス（1815 年 2 月 12 日－1854 年 11 月 18 日）と軟体動物学者のシルバヌス・ハンレイ（1819 年 7 月 7 日－1899 年 4 月 5 日）の共著である。

マン島に生まれたフォーブスは、幼少期から海や磯の生物に興味を持ち、生物がどのような地域に分布しているかを解明する生物地理学に携わった。地中海での調査に基づき 1843 年に発表した、水深 300 ファゾム（約 548 m）より深い場所は生物のいない「無生物帯」であるとした研究は有名である（後に、より深海にも生物が生息していることが発見された）。またフォーブスは、イギリス諸島と大陸欧州に共通した生物が生息していることから、この両者を繋ぐ陸地ないし氷河があったと述べるなど、古生物学にも研究を広げていた。しかし、フォーブスは敬虔なイングランド国教会の信者として、進化論を支持せず、生物は神のプランに沿って設計されたと主張した。これに対する反証が、同時代のダーウィンによって 1859 年の『種の起原』にまとめられた。フォーブス自身は『種の起原』が出版される 5 年前に亡くなっていたが、フォーブスが最後に手がけた原稿を含めた『ヨーロッパ海の自然史』が『種の起原』と同年に出版されていることは、実に因果的である。

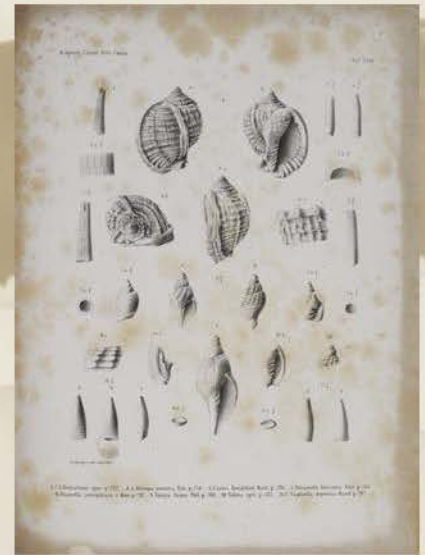
一方、ハンレイはオックスフォードに生まれ、21 歳にして初めての論文を執筆する。この論文では、3 種類の貝類を新しく記載し、ウィリアム・スウェインソンの書籍に引用されるなど、新進気鋭の軟体動物学者であった。1863 年に出版した書籍には、実験的に写真を使った図版を載せている。私生活では、膨大な貝と書籍のコレクションがあったという。書籍のコレクションには、大量の書き込みや図版の切り抜きがあり、ハンレイの人柄を偲ばせる。数千点におよぶ貝類コレクションは、ハンレイの死後、大英博物館と、アメリカのいくつかの博物館に納められた。（唐沢）



# オスカー・シュパイエル著 1870 年刊 『カッセル中新統の貝類化石』

Oscar Speyer, 1870.

*Die Conchylien der Casseler Tertiärbildungen:  
Siebente Lieferung (Schluss der Univalven).*



ドイツ中央部に位置するヘッセン州カッセルはグリム童話で著名なグリム兄弟ゆかりの地であり、また芸術祭ドクトメンタでも広く知られた都市である。しかしその一方で、三畳紀（約 2 億 5217 万～約 2 億 130 万年前）から中新世（約 2303 万～約 533 万年前）にかけての古い地層が露出し、豊富な化石が産出することでも有名である。

オスカー・シュパイエル（1827 年 7 月 4 日-1881 年 1 月 6 日）は、プロイセン（現ドイツ）のハースフェルトに生まれたが、カッセルでギムナジウム（中高一貫校）、職業訓練学校時代を過ごした。このときにカタツムリに関する研究をしたことから、生物学者・古生物学者としての道を歩むことになる。翌年、採掘場で働きはじめたシュパイエルは、その傍らで数学と科学を学び、まずは教育者としてのキャリアを積む。1852 年には実科学学校（日本の中学校・高校に相当）の教員に、1855 年に職業訓練学校の補助教員になったのを経て、1865 年には職業訓練学校の正規の教員として務めた。その一方で、1855 年に博士号を取得し、カッセルの化石に関する研究も精力的に続けた。主に、第三紀（6600 万～259 万年前）の軟体動物の分類に取り組んだほか、絶滅ゾウ類のマストドンも発見している。これらの業績から、1859 年から 1865 年まではカッセル自然史学会の理事を務め、1873 年からはプロイセン地質調査所に所属した。このころには、ドイツ中央部のザーレ川およびその支流ウンシュトルト川およびアイクスフェルト周辺の 2 万 5 千分の 1 の地質図を作成している。晩年、彼は自身の化石コレクションをベルリンの博物館へ寄贈しており、彼が心臓発作で亡くなったのは、この博物館へ向かう途中の出来事であったという。

今回展示されているのは、ドイツの古生物学専門誌であり、世界的にも最も伝統のある古生物学の学術誌のひとつ、『パレオントグラフィカ (Palaeontographica)』にシュパイエルが投稿した論文「カッセル中新統の貝類化石」の 1 編である。シュパイエルは『パレオントグラフィカ』に 4 編にわけて「カッセル中新統の貝類化石」を投稿しており、いずれにも単色刷りながら、緻密なスケッチが掲載されている。化石貝類は、「装飾」と呼ばれる殻表面の凹凸や、卵から孵化した直後の幼生期に形成する初期殻などの形態によって分類されるため、こうした細かな図版が必要不可欠であり、シュパイエルの研究に対する繊細な姿勢が偲ばれる。（唐沢）